

| | |
|---------|----------------------------------|
| 氏名 | 鈴木 元彦 |
| 学位の種類 | 博士 (芸術) |
| 学位記番号 | 甲第58号 |
| 学位授与日 | 平成26年3月23日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 論文題目 | 聖なる建築空間 —聖なる軸、聖なる比、聖なる光の三位一体— |

| | | |
|------|--------------------------|-------|
| 審査委員 | 主査 教授 | 本江 邦夫 |
| | 副査 教授 | 須永 剛司 |
| | 副査 教授 | 田淵 諭 |
| | 副査 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科准教授 | 西田 雅嗣 |

内容の要旨

「聖なる空間」をデザインするとは、崇高な雰囲気に含まれた空間を建築的に表現することである。それは、混沌とした世界のなかに秩序をみいだすことを意味する。秩序ある建築表現は、「聖なる軸」、「聖なる比」、「聖なる光」の三つの要因が体系的に結びつくことによって象徴しているのではないかと推論した。このような動機から、「聖なる空間」がどのような建築表現によって実現されるのかについて、自らの実践を通して、「聖なる軸」他の表現研究に努めた。本論文は沈黙が支配し、厳粛な雰囲気を感じる「聖なる空間」に聖別する必要条件について解明することを目的とした。加えて、キリスト教を中心とした哲学・神学、建築の立場から、分析・考察するものである。

第Ⅰ章では、「聖なる」の意味について、原典である古典ギリシア語から定義について考察した。次に、建築の意味、建築と空間の関係、人間にとっての建築の役割について、ロダン (Auguste Rodin, 1840-1917) とミルチャ・エリアーデ (Mircea Eliade, 1907-1986) を例に取り上げて論じた。さらに、「聖なる空間」である中世のル・トロネ修道院について、「聖ベネディクトの戒律」を遵守するシトー会修道院長の聖ベルナルド (聖ベルナルド、Saint Bernard, 1090-1153) の清貧思想である簡素で単純な建築表現について論考した。

第Ⅱ章では、聖書物語の「ヤコブの梯子」と、古代ギリシア哲学者のプラトン (Platon, B. C. 427- B. C. 347) やアリストテレス (Aristoteles, B. C. 384-B. C. 322)、新プラトン主義者であるプロティノス (Plotinos, 207-270)、『天上位階論』の著者である偽ディオニュシオス・アレオパギタ (Pseudo-Dionysius Areopagita, 5C-?) の思想を通して、「光の存在」である神と、人間の関係について論考した。『天上位階論』は神と人間の「交わり」の関係を光の上昇論として概念化したものであるのだろう。その上昇志向は超越的な方向性と内面的な方向性をもった光の軸 (「聖なる軸」) である。また、修道院の回廊は求心的な歩みの行為によって超越的な上昇感をもたせている。

第Ⅲ章では、「聖なる比」を音楽に内在する数の調和や、幾何に内在する数の調和をつくりだす「数の比率」であると位置づけた。換言すると、建築空間には、神の意匠である幾何によって形態を象徴する「聖なる比」が存在すると考察した。次に、ル・コルビュジエ (Le Corbusier, 1887-1965) とパスカル (Blaise Pascal, 1623-1662) を例に挙げ、初原的な形態である幾何と直感的な精神を調和する手法について考察した。ル・コルビュジエは抽象的な建築形態と、

調和を破壊する開口部を「指標線」によって調和させている。

第IV章では、マックス・ピカート (Max Picard, 1888-1965)、ルドルフ・オットー (Rudolf Otto, 1869-1937)、エドモンド・バーク (Edmund Burke, 1729-1797) を例証として挙げ、崇高な雰囲気について論述を試みた。崇高さは単純な空間に「沈黙」をもたらし、物質としての闇が非物質の光のなかに溶け込んだ「薄暗さ」である。光の上昇感「沈黙」により、自己の意識が肉体から解放され、天高く舞い上がり、漆黒の闇のなかで光輝く「光の存在」へと向かう「聖なる軸」となる。また、「聖なる光」は光輪などの聖性を想起させる黄色の光から、純潔さを想起させる白い光へと変容していることを明らかにした。

第V章では、幼少期から時間を過ごしてきた場所であり、どこことなく精神が落ち着く、「聖なる空間」である教会の記憶と、物質と光の関係について論じた。教会の記憶は、静穏でありながらも畏敬の念を抱かせる雰囲気である。私はこの数年、「光の存在」を知覚する「聖なる空間」の建築表現について探究している。それは、物質的な素材を非物質的な光へ昇華することで、「光の存在」を象徴することである。私は目には見えないけれども見ることができる、何も存在しないけれども何かが存在している「聖なる空虚」を表現している。つまり、私の作品は普通を越えた普通、単純を越えた単純、抽象的で具象的な作品をめざしている。

最後に、「聖なる空間」を聖別・聖化する建築表現とは、神と人間の交わりとしての中心を象徴する「聖なる軸」によって空間を限定し、神の意匠としての幾何による形態を象徴する「聖なる比」によって空間に調和を与え、祈りの空間に相応しい崇高な雰囲気を象徴する「聖なる光」によって空間に薄暗さと沈黙をつくり出すことであると結論づけることができた。

審査結果の要旨

大建築の正面に時代精神あるいは超越的な理念が発現するというのは、よく言われることです。これは文明の発生を大神殿建築の正面性になぞらえたヘーゲルの象徴的芸術形式という考え方にも明瞭に見て取れる、すこぶる西欧的な視点です。これに対し、今日の、あるいは現代の建築の最大の問題点は、建築にかんするそうした大枠が希薄になり、良く言えば独創的、悪く言えばけれんみしかない「個」つまり「建築家」の多様な様式の氾濫にあります。「時代」と「社会」を背負いながら、特定の環境に自らを調和的に接合する建築本来のあり方が失われ、建築家の個性がやたらとロマンチックに強調され、いかにも誰それ「<らしい>建築」(飯島洋一)として定番化され、ブランド化されていく—その最たる例、というか惨状をそこかしこに見ることができます。

いったいつから建築は、そこに暮らし住む者たちをほとんど無視して、ここまで独善的かつ特権的なものとなったのか？ 建築とはもともとどうあるべきなのか？ これは俄かには答えがたい大問題ですが、鈴木元彦さんの提出論文『聖なる建築空間』を精読したうえで明らかに言えることは、建築とはすべからず理念的なものであるということです。これはごくごく卑近な言い方をすれば、どのような家に住みたいか、住ませたいかという、ある意味ではあまりに常識的な、しかしそれゆえに見過ごされやすい前提です。

「牧師の両親のもとに生まれ育った、五代目のクリスチャン」(p. 89)である鈴木さんのキリスト教会についての考え方、いやむしろ信念は次の言葉に集約されているように思えます。

「私の作品は光の形而上学で成り立っているようだ。私は「聖なる軸」、「聖なる比」、「聖なる光」の三位一体による建築表現をもちいて、「光の存在」を象徴する「聖なる空間」を表現している。」(p. 5)

キリスト者でないと、いやキリスト者であってもここにある「聖なる」の三連発には面食ら

うし、歴史的文献的な若干の考察があっても、「聖なる」ものが彼にとって、実のところ何を意味するのか必ずしも明瞭ではありません。とはいえ、呪文のように畳みかけるこの勢いこそが、建築を志す者の私的キリスト教建築論ともいべき本論文の最大の持ち味であるとは言えるでしょう。随所に旧約・新約聖書の語句が散りばめられたこれは、キリスト教建築のあるべき姿の模索であると同時に、信仰告白でもあるのです。そして注目すべきは、鈴木さんの論考の出発点であり、おそらくは最終目標地点でもあるのが、南仏・プロヴァンス地方の森で埋まった谷間にあるシトー会の、今は使われていないル・トロネ修道院であることです。

シトー会の、いやそれ以上に西欧中世キリスト教会の精神的代弁者の重要な一人だった聖ベルナルドの、一種の禁欲主義に呼応したここにしばし滞在し、あらゆる装飾性を排した心的エネルギーを発条として段階的に神に迫ろうとする、その厳格な宗教性に満たされた精神的な空間を体感した鈴木さんにとって、偽ディオニュシオスの『天上位階論』はほとんど自明のこのように思えたことは想像に難くありません。問題は、この書物に絡めて彼が、「プロティノスの哲学の根底にある超越的な存在論としてのプラトンと、内面的な存在論としてのアリストテレスによる2つの上昇感によって、神と人間の「交わり」としての「聖なる軸」をつくりだしている」(p. 110)と断言していることですが、ここにはさらなる考察の余地がありそうです。これに限らず、三つの「聖なる」もののうち、もっとも難渋なのが「聖なる軸」をめぐる記述であることは、やはり指摘しておくべきでしょう。その一方で、「回廊は日常空間を非日常空間へと聖別・聖化する「聖なる軸」を根底とした建築表現である」(p. 54)といった感想にはキリスト者=建築家の一種の閃きを感じないわけにはいきません(写真もよくする鈴木さんが撮ってきたル・トロネの回廊の写真は、それ自体ひじょうに純度が高く宗教的な静謐さを帯びています)。また、天上の光をめざす「聖なる軸」の垂直性に対して、教会堂西正面を規定する東西軸の水平性をもそれなりに考慮することができれば、天と地をめぐるより深められた議論となったことと思われます。

「聖なる比」というのは、これまたル・トロネをモデルとして—これをプラトニズムの典型と言うべきか—そこに幾何学的比率を看取り、神の臨在を直観する立場です。これは音楽つまり厳格に比例に基づいた芸術に天体の運行を照応させる古代ギリシアのピタゴラス派の思想を考え合わせれば、論理的かつ明瞭に納得できることです。

「聖なる光」の「光」、つまり物理的な対象としての光については、綿密な、科学的ともいえる分析がなされています。しかし、ここでも問題は「聖なる」ものが旧約聖書の冒頭の「光あれ」と同様、ア・プリオリに到来することです。興味深いのはカトリックのミサの後半にある「感謝の賛歌」で最初に「聖なるかな」の三連発があることで、これにより宗教的高揚感がいやが上にも募らざるをえないことです。鈴木さんの「聖なる」の三連発にも、すでに触れましたが、同様の、とても宗教的なエネルギーを感じるのです。

鈴木さんのいう「光」とは、一般の予想に反して、真昼のそれではありません。それは要するに、崇高さと結びついた、いかにも瞑想的な光と闇の交錯する薄暗さのことです。ル・トロネの暗い回廊に天上から満ちては引く、ほの明るい光の潮のごときもの、これが「聖なる光」の実態と言えるでしょう。そして彼はスイス・ロンシャンに建つ、ル・コルビジェ設計のあの有名な小さな礼拝堂を冬の朝方に撮影したさいに、「濃霧によって遮られた陽光」の「弱々しい光は、あらゆる草木や建築などの物質を溶解しているようであった。そして、空間や建築は、単純化されることにより、物質の表象への意識から解放された」と感じ、さらにはこれを沈黙と結びつけることにより「精神が上昇することを確認した」のです(p. 84)。マックス・ピカートとルードルフ・オットーを援用しつつなされる、こうした「聖なる光」と沈黙の関係性の記述は、論理的な詰め甘さを開示しながらも、実体験に裏付けられた説得力を帯びています。

以上見た、聖なる軸、聖なる比、聖なる光のまさに三位一体こそが鈴木元彦さんの、やがて実現すべき教会堂を根底から規定するものです。ル・トロネ修道院に収斂することにより生まれた彼の建築観は、多少乱暴な言い方になりますが、現代のポストモダンの自堕落な建築に

対するロマネスクのアンチテーゼとも言うるものであり、キリスト教会というもっとも理念的な建築の構想を通じて、人間と建築のあるべき関係を今いちど問い直す、その意味でまさに傾聴すべき論考と言えるでしょう。

(本江 邦夫)